

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

論文題目

子どもと支援者が「ともに学び成長する」年少者日本語教育  
—「ポートフォリオ」を活用した日本語指導実践をもとに—

浅井 涼子

2010年3月

## 第1章 研究背景

本研究は、JSL の子どもが学校の中で主体的に学んでいける環境をつくりたい、そのために学校と協働関係を築きたいという筆者の思いに端を発する研究である。2008 年 6 月から 2009 年 10 月にかけて筆者が行った 2 人の JSL 生徒（生徒 D、生徒 Q）それぞれに対する日本語教育実践を通して、多様な背景を持つ JSL 児童生徒のこぼの力を学校の中で育てていくために必要な視点・要素を考えていくことを目的としている。

第 1 章では、まず年少者日本語教育を取り囲む社会的背景と、筆者および前述の 2 人の生徒の個別具体的な背景から年少者日本語教育の課題を提示した。前者については、文部科学省の「日本語指導が必要な外国人児童生徒」に関する統計から、JSL 児童生徒が国内の公立学校において珍しくない存在であるにもかかわらず、それに対する教員志望の大学生や現職教員たちに十分認知されていないという現状を指摘した上で、JSL 児童生徒の日本語教育において、学校と日本語教育の専門家の「協働」の視点と子どもたちの「主体性」の視点が重要であるという筆者の意見を述べた。後者については、2 人の生徒と出会う前と出会い関わっていく過程における筆者の問題意識と日本語教育実践の変容過程を示し、本来学ぶ意欲や年齢相当の認知能力を持っているにも関わらず、その芽を伸ばしていく機会を十分に得られない JSL の子どもたちの存在を示した。そして、年少者日本語教育実践で目指すものとして、次の三つの観点をまとめた。①JSL の子どもに育成すべき力とは書字能力に留まらず、「メタ認知能力」や「自己学習能力」といった力をも含む幅広い力である。②このような子どもの学びを支える支援者自身もまた成長する主体である。③①と②は子どもと支援者の動的な関係の中で育まれるものである。

## 第2章 先行研究

第 2 章では、第 1 章で述べた問題意識の変遷過程で筆者が着目したポートフォリオに関する理論的な知見を整理し、年少者日本語教育実践への示唆を得ることを目指した。ポートフォリオに着目した理由は、生徒の主体的かつ自律的に学んでいく力を育成することと筆者と学校教員とがともに生徒を見守り支援していくことを促すと考えたからである。

学校教育、言語教育双方で用いられているポートフォリオについて検討した結果、ポートフォリオの定義、種類と活用方法は用いられる分野やそこで目指される目標によって様々に使い分けられており、ポートフォリオの解釈や実体は一様ではないということが分

かった。ポートフォリオは構成主義の学習観を背景とし、学習者と教師が学びの過程を共有することによって学習者の学習向上と教師の指導修正というように学習者と教師双方にとって利点があり、さらに保護者などへの説明責任を果たすといった機能もあることから、第1章で述べた本研究で目指す年少者日本語教育実践を具現化する上で極めて示唆的であることが明らかになった。

以上を踏まえて、ポートフォリオの知見と年少者日本語教育実践の関連性について考察した。年少者日本語教育実践においては、子ども・日本語指導員・学校教員がともに子どもの日本語学習・支援のために協働する「実践共同体」を構築する必要があり、その際ポートフォリオは三者をつなぐ「共通言語」としての役割を果たすと主張した。具体的には、ポートフォリオが「実践を『ことばのレンズ』見直し、日本語指導員と学校教員と共有する」場合と、「実践を『学びのプロセス』で見直し、子どもと支援者が共有する」場合の媒体物となるとまとめた。そして、本研究の研究課題として次の3点を設定し、日本語教育実践を通して検討していくこととした。

〈研究課題1〉なぜ「ポートフォリオ」が必要なのか

〈研究課題2〉「ポートフォリオ」によって、どのようにことばの学びが広がるのか

〈研究課題3〉「ポートフォリオ」によって、何を共有するのか

また、本研究の対象となる2人のJSL児童生徒の背景や日本語教育実践の概要、研究方法についても述べた。

### 第3章 2008年度の日本語教育実践

第3章では、筆者が2人の生徒それぞれと出会い、関係を構築しながら、また自身の教育観を揺さぶられながら展開した2008年度の日本語教育実践を記述した。その結果、生徒Dについては、来日当初から積極的に他者と関わりながらことばの力を育んでいく様子が見られたが、年度末の頃に不登校に陥ってしまうという、日本語教室での様子からは想像もつかない顛末を迎えることとなった。一方生徒Dとは対照的で大人しく自分からは他者と関わるのが苦手な生徒Qについては、生徒Qにとって日本語を使う必然性の無さがことばの力の伸長を阻害しているのではないかという状況が見えてきた。

考察の結果、このように2人が全く異なることばの力の変容を辿り、「適応」しているかに見えた生徒Dが学校に通えなくなり、「不適応」に陥っているかに見えた生徒Qが元気に登校を続ける要因として、生徒の性格はもちろんであるが、それとは別に生徒のこと

ばの力に対する周囲の評価とそれに伴う働きかけに課題があるのではないかと問題提起した。そして、単に情報共有を行っていた学校教員との関係を見直す必要があることを明示した。また、筆者が一方的にデザインしていた日本語指導を見直し、生徒自身が自分で計画したり、振り返ったりと学習を管理しながら主体的に学べる環境をつくる必要があることにも言及した。

#### 第4章 2009年度日本語教育実践

第4章では、第3章で明らかとなった問題の打開策としてポートフォリオに注目し、日本語教育実践を行った。「ポートフォリオ」を媒体として、学び手である生徒自身も、そしてそれを支援する筆者や学校教員も、ともにやりとりの過程で見えることばのありように着目し、そこから自身の学習あるいは支援を内省し、新たな気づきを得ながら実践を進めていくことを目指した。

実践と考察の結果、「ポートフォリオ」を通して、まず生徒には自身の課題から目標を立てたり、在籍学級での学習進度を考慮しながら日本語教室での学習計画を立てたりする様子が観察された。またそのように行われる学習とは、第3章において筆者が一方的に計画していた時よりもより主体的に行われており、ことばのやりとりが増えたり、生徒のパフォーマンスが向上したりしていることが明らかになった。このような生徒の姿を目の当たりにして、筆者自身は生徒のことばの力や認知的な力、主体性をより感じるようになり、生徒の実態に根差して生徒と協働して指導内容をデザインしていくことが可能となった。さらに、「ポートフォリオ」を通して指導の過程、生徒の学びの過程を具体的に示すことで、学校教員の気づきを促し、生徒が参加したり、支援を受けたりする場が広がる可能性があることも示唆された。また、このように生徒の成果物を提示しながら、活動時の状況と生徒の様子を伝えようとする行為は、学校教員からも自然に行われるようになり、そうしたやりとりの中で、筆者と学校教員が互いに生徒に対する認識と問題意識を深めていくことができたと考える。以上のように、「ポートフォリオ」を通して、子ども・筆者・学校教員の関係性に肯定的な変化が見られた。

#### 第5章 総合考察

第5章では、まず第2章で設定した三つの研究課題に関する考察を行った。

一つ目の「なぜ『ポートフォリオ』が必要なのか」については、2008年度の日本語教育

実践について考察した第3章から検討した。支援者の観点においては、生徒の実態を十分に把握して共有できていなかったという反省から、子どもと支援者双方のやりとりによって織りなされたポートフォリオを通して、子どもがどんな時にどのようにことばを使っていたのか、どんな時に困難を感じていたのか、その時自分はどのような支援をしたのかをメタ的に捉えて子どもの「ことば」に関する問題意識と認識を深めていく上で、ポートフォリオは有効であると主張した。また、このような計画、実践、内省の過程がポートフォリオとして可視化されていることにより、支援者個人の気づきを越えて、他者と共有してさらに認識を深めていくことにつながると主張した。また子どもの観点においては、日本語教育実践の中で子ども本人の主体性とそれを支える視点が看過されていたという反省から、目標分析の中に子どもを位置づけ、学習の過程で子どもに積極的に自己評価させ、それによって子どもが自己の学習に意義を見出したり、自己に対して肯定的な評価をしたりできるような「場」としてのポートフォリオの有用性を主張した。

二つ目の『『ポートフォリオ』によって、どのようにことばの学びが広がるのか』については、2009年度の日本語教育実践について考察した第4章から検討した。まず子ども自身にとっては、自らが必要性を感じている内容を学習目標に据え、計画を立てたことにより積極的に学習に参加し、支援者とのやりとりが活発に行われている様子が見られた。このことから、生徒はより多くのことばに触れ、使う機会が得られるという点、学習を振り返ったり見通したりするという新たな「文脈」が生まれ、メタ認知能力や自己学習能力が発揮されるようなやりとりが生じているという点でことばの学びが促進されると主張した。次に指導員である筆者にとっては、前述のような子どもの様子を目の当たりにして、これまで見えていなかった子どもの潜在能力に気づくことができ、子どもの実態により即したことばの学びの場を提供できるようになったと主張した。最後に、支援者同士の協働の観点から、「結果」のみから在籍学級において「できる」あるいは「できない」と判断するのではなく、「プロセス」に着目し、共有することによってより生徒の現状に即した支援を施せるようになってきた。このことから、生徒の参加できる場が広がり、より広い場面でのことばの学びが実現されると主張した。

三つ目の『『ポートフォリオ』によって、何を共有するのか』については、上記二つの検討を踏まえて、検討した。まずJSLの子どもと支援者は「学びのプロセス」を共有すると主張した。子どもは、これまで行ってきた学びがどのように自分の中に息づいているのか、またこれから行おうとしている学びは自分をどのように形づくっていくのかを「ポートフ

オリオ」を通して視覚的に捉えることができる。また、そのプロセスが「ポートフォリオ」として可視化されていることによって支援者が積極的にそこに介入していくことができる」と述べた。一方、支援者同士は「その子どもとその支援者の関係性と、その関係性ゆえに生じた子どものことばのありようとそれに応じた支援者の支援のありよう」を共有すると主張した。

以上を踏まえて、年少者日本語教育実践における「ポートフォリオ」には以下の四つの観点が盛り込まれている必要があるとした。

- ①子ども自身が、今・ここにある学びを、これまでの学びとこれからの学び、日本語教室での学びと在籍学級での学びといったように異なる時間軸、空間軸にある学びと結び付け、主体的にかつ自律的に、そして時には戦略的に学んでいくことを促進するものである
- ②支援者が自分自身の支援過程を内省するとともに、子どもの実態を把握し、子どもの「ことば」に関する問題意識と認識を深め、よりよい支援のあり方へと導くものである
- ③その子どもとその支援者の関係性と、その関係性ゆえに生じた子どものことばの力のありようとそれに応じた支援者の支援のありようが見えるものである
- ④上記①～③が子どもと支援者、支援者同士の対等で協働的なやりとりの中で行われている

そして、議論すべきは「ポートフォリオ」に何を入れるか、どのような手順で行うかといった方法論ではなく、「ポートフォリオ」をもとに子どもと支援者が、あるいは支援者同士が対等な関係でやりとりを行い、そこからそれぞれが気づきを得、そしてそれが日本語教育実践の発展—子どものことばの学びの広がりとそれによる子どものことばの力の伸長—につなげていくということであり、「ポートフォリオ」とはそのための「媒材」にすぎないと主張した。

まとめとして、「JSLの子ども『ことばの力』を見つけ、育む」のは専門家である日本語指導員という限られた立場にあるものだけでなく、学校教員でもあり、子ども本人でもあることを指摘した。そして「ポートフォリオ」は三者が「ともに学び成長していく」ことを促すと主張し、本研究で明らかになった「ポートフォリオ」の内実とは年少者日本語教育実践のあり方そのものであるという筆者の主張をまとめた。

最後に、生徒Dのように明るく積極的で学ぶ意欲もある子どもがドロップアウトという

道を選ばざるを得ない要因を探り、改善していく必要があるという今後の課題を提示した。そのためにも、子ども自身とそれを支える支援者が、子どもの小さな成長を見逃さずに捉え、次の段階へつなげていくことを可能にするポートフォリオのさらなる実践研究が必要である。

## 【参考文献】

- 浅井涼子 (2009a) 「アウトプットが少ない生徒への日本語指導－実践者の言語教育観の変容をもとに－」『年少者日本語教育実践研究』No.12、早稲田大学大学院日本語教育研究科年少者日本語教育研究室、pp.24-33.
- 浅井涼子 (2009b) 「JSL 生徒・学校教員・日本語指導員をつなぐポートフォリオ実践－『個人の成長』から『実践共同体の発展』へ－」『年少者日本語教育実践研究』No.13、早稲田大学大学院日本語教育研究科年少者日本語教育研究室、pp.1-14.
- 石井恵理子 (2006) 「年少者日本語教育の構築に向けて－子どもの成長を支える言語教育として－」『日本語教育』128号、日本語教育学会、pp.3-12.
- 石井恵理子 (2009) 「JSL 児童生徒の日本語学習支援体制の整備－教員養成・研修を中心に－」水谷修監修『日本語教育の過去・現在・未来 第1巻「社会」』凡人社、pp.214-240.
- 池上摩希子 (2009) 「年少者日本語教育における実践と研究－『実践を語る』意味－」川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編『「移動する子どもたち」のことばの教育を考える－ESL 教育と JSL 教育の共振－』ココ出版、pp.228-237.
- 裔立苒 (2009) 「JSL 生徒と支援者が共に支えあう関係による日本語支援」川上郁雄編『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー－主体性の年少者日本語教育－』明石書店、pp.174-192.
- エンゲストローム, Y. 著、山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登訳 (1999) 『拡張による学習－活動理論からのアプローチ－』新曜社.
- 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」編 (2007) 『自律を目指すことばの学習－さくら先生のチュートリアル－』凡人社.
- 尾関史 (2007) 「主体的な自己実現を目指す年少者日本語教育に向けて－ある外国人児童への日本語支援からの気づき－」『早稲田日本語教育学』第1号、pp.11-23.
- 尾関史 (2008) 「『意味創り』を目指したことばの支援の可能性－移動する子どもたちが主体的に学習に参加するために－」『早稲田日本語教育学』第3号、pp.11-24.

- 金田智子 (2009) 「日本語教師の育成および成長支援のあり方ー『成長』にかかわる調査研究の推進を目指してー」水谷修監修『日本語教育の過去・現在・未来 第2巻 教師』凡人社、pp.42-63.
- 川上郁雄 (2003) 「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」『早稲田日本語教育研究』第2号、pp.1-16.
- 川上郁雄 (2005) 「新宿区における『日本語教育ボランティア』活動と JSL バンドスケールの意義ー大久保小学校の調査と実践を通じてー」早稲田大学大学院日本語教育研究科『年少者日本語教育実践研究』No.4、pp.1-9.
- 川上郁雄 (2006) 「年少者に対する日本語教育の課題」川上郁雄編『「移動する子どもたち」と日本語教育ー日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考えるー』明石書店、pp.14-22.
- 川上郁雄 (2009a) 「Children Crossing Borders : CCBを考えるー子どもにとって日本語は母語か第二言語か継承語か」<http://www.gsjal.jp/kawakami/dat/sydney0901.pdf> (2009/09/14閲覧)
- 川上郁雄 (2009b) 「主体性の年少者日本語教育を考える」川上郁雄編『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシーー主体性の年少者日本語教育ー』明石書店、pp.12-37.
- 川上郁雄 (2009c) 「年少者日本語教育における『支援』と『連携』を考える視点とは何かーJSLバンドスケールを用いた実践研究をもとにー」『早稲田日本語研究』第18号、pp.1-11.
- 川上郁雄 (2009d) 「リテラシーはどこにあるのか」リテラシーズ研究会編『リテラシーズ4ーことば・文化・社会の日本語教育へー』くろしお出版、pp.182-188.
- 川上郁雄・池上摩希子 (2006) 「年少者日本語教育の歴史と展望」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』アルク、pp.47-73.
- 川上郁雄・高橋理恵 (2006) 「JSL 児童の日本語能力の把握から実践への道すじー新宿区大久保小学校の実践をもとにー」『日本語教育』128号、pp.24-35.
- 河上加苗 (2008) 『年少者日本語教育実践の動態性ー「子どもの実態」と「実践者の問題意識」から実践を考えるー』早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文 (未公刊)
- 川村千絵 (2005) 「作文クラスにおけるポートフォリオ評価の実践ー学習者の内省活動に関するケーススタディー」『日本語教育』125号、pp.126-135.
- 北見優 (2008) 『「個を生かし育む」年少者日本語教育ーJSL 児童への本作りを中心にした

- 日本語教育実践からー』早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文（未公開）
- ギボンズ, P. (2009) 「ことばのレンズを通して教科学習を考える」川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編『「移動するこどもたち」のことばの教育を考えるーESL教育とJSL教育の共振ー』ココ出版、pp.44-72.
- グース, J. (2009) 「オーストラリアのESLバンドスケール再考ーESL生徒の評価と支援に向けた再調査を踏まえてー」川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編『「移動するこどもたち」のことばの教育を考えるーESL教育とJSL教育の共振ー』ココ出版、pp.74-109.
- 久保田賢一 (2000) 『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部.
- 古賀和恵・古屋憲章 (2009) 「子どもたちに必要な『ことばの力』とは何かー年少者日本語教育と国語教育の言語能力観から見えてくるものー」川上郁雄編『「移動するこどもたち」の考える力とリテラシーー主体性の年少者日本語教育ー』明石書店、pp.237-256.
- 齋藤伸子・林さと子・梅田康子・春原憲一郎 (2009) 「『自律学習』を問い直す」『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.91-102.
- 齋藤ひろみ (1998) 「内容重視の日本語教育の試みー小学校中高学年の子どもクラスにおける実践報告ー」『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号、pp.106-130.
- 齋藤ひろみ (2002) 「小中学校における教師と研究者の協働研究」『第3回外国人児童生徒教育フォーラムー大学と教育現場の連携のあり方を探るー』東京学芸大学国際教育センター、pp.57-66.
- 佐藤学 (2001a) 「いま、なぜポートフォリオ実践なのかーこれからの学校教育における新しい教育評価としてー」佐藤学編『基礎からわかるポートフォリオの作り方・すすめ方』東洋館出版社、pp.8-17.
- 佐藤学 (2001b) 「ポートフォリオ実践のすすめ方」佐藤学編『基礎からわかるポートフォリオの作り方・すすめ方』東洋館出版社、pp.18-27.
- 下絵津子 (2006) 「第二言語教育におけるポートフォリオの活用」『宮崎公立大学人文学部紀要』第14巻第1号、pp.149-167.
- 清水睦美・児島明編 (2006) 『外国人生徒のためのカリキュラムー学校文化の変革の可能性を探るー』嵯峨野書院.
- シャクリー, B.D.・バーバー, N.・アンブローズ, R.・ハンズフォード, S.著、田中耕治監訳 (2001) 『ポートフォリオをデザインするー教育評価の新しい挑戦ー』ミネル

ヴァ書房.

- 田島信元・西野泰広・矢澤圭介編 (1985) 『子どもの発達心理学』福村出版.
- 田邊裕理 (2009) 「学校に通うことができない JSL 生徒のことばの学びをどう捉えるか」  
川上郁雄編『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日  
本語教育—』明石書店、pp.218-236.
- 土屋真理子 (2008) 「自律的な学習を目指した教室授業における自己評価シートの役割」  
『桜美林言語教育論叢』4、桜美林大学、pp.1-13.
- 中尾桂子 (2003) 「『子どものための日本語』指導」岡崎洋三・西口光一・山田泉編『日  
本語教師のための知識本シリーズ 3 人間主義の日本語教育』凡人社、pp.134-170.
- 西岡加名恵(2003) 『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法—新たな評価基準の創出  
に向けて—』図書文化.
- 浜田麻里・市瀬智紀、徳井厚子・金田智子・齋藤ひろみ (2009) 「多様な言語文化背景を  
もつ子どもたちへの日本語教育に携わる教員および教員養成系大学の学生の認識—  
教師のキャリア形成の視点から—」『2009 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』  
pp.33-42.
- ハモンド,J. (2009) 「スキヤフオールディングの実践とその意味—在籍学級の ESL 生徒  
の学びをどう支えるか—」川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広  
編『「移動するこどもたち」のことばの教育を考える—ESL 教育と JSL 教育の共振  
—』ココ出版、pp.8-42.
- 舟橋宏代 (2005) 「ポートフォリオを利用したフリートークの「会話」授業—学習者の自  
律学習を支えるために—」『鈴鹿国際大学紀要 CANPANA』No.12、pp.161-173.
- ベーカー,C.著、岡秀夫訳 (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店.
- 保坂裕子(2007) 「教育における協働の学び」やまだようこ編『質的心理学の方法—語り  
をきく—』新曜社 pp.252-268.
- 細川英雄 (2008) 「日本語教育学における『実践研究』の意味と課題」『早稲田日本語教  
育学』pp.1-9.
- 間橋理加 (2006) 「『JSL バンドスケール』を使った在籍クラスと日本語指導の連携によ  
る教科指導—小学校高学年 JSL 児童の場合—」川上郁雄編『「移動する子どもたち」  
と日本語教育—日本語を母語としない子どもたちへのことばの教育を考える—』明石  
書店、pp.190-207.

- 光元聰江・岡本淑明（2006）『外国人児童・生徒を教えるためのリライト教材』ふくろう出版.
- 箕浦康子（1999）『フィールドワークの技法と実際－マイクロ・エスノグラフィー入門－』ミネルヴァ書房.
- 森沢小百合（2006）「JSL 児童の『読む』力と『自己有能感』の育成を目指した日本語教育支援」川上郁雄編『「移動する子どもたち」と日本語教育－日本語を母語としない子どもたちへのことばの教育を考える－』明石書店、pp.75-99.
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領』東山書房.
- 文部科学省（2009a）『日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査（平成20年度）』の結果について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/21/07/\\_icsFiles/afieldfile/2009/07/03/1279212\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/07/_icsFiles/afieldfile/2009/07/03/1279212_1_1.pdf)（2009/11/25 閲覧）
- 文部科学省（2009b）「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/21/07/\\_icsFiles/afieldfile/2009/07/06/1279262\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/07/_icsFiles/afieldfile/2009/07/06/1279262_2_1.pdf)（2009/11/25 閲覧）
- 山住勝広（2008）「ネットワークからネットワークへー活動理論の新しい世代ー」山住勝広・エンゲストローム, Y.編『ネットワークー結び合う人間活動の創造へー』新曜社、pp.1-57.
- 山脇啓造・いちょう小学校編（2005）『多文化共生の学校づくりー横浜市立いちょう小学校の挑戦』明石書店.
- ヨーロッパ日本語教師会（2006）『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Language』国際交流基金.
- 横溝紳一郎（2000）「ポートフォリオ評価と日本語教育」『日本語教育』107号、pp.105-114.
- 吉島茂訳編（2004）『外国語教育Ⅱー外国語学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠ー』朝日出版社.
- レイヴ, J. ・ウェンガー, E. 著、佐伯胖訳（1993）『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー』産業図書.
- 早稲田大学大学院日本語教育研究科年少者日本語教育研究室編（2004）『JSL バンドスケール試行版・中学高校編』早稲田大学大学院日本語教育研究科年少者日本語教育研究室.

Cummins, J. & Swain, M. (1986) *Bilingualism in Education*, New York, Longman:  
Gibbons, P. (2002) *Scaffolding Language, Scaffolding Learning: Teaching Second Language in the Mainstream Classroom*, Portsmouth, NH:

**【参考資料】**

『社会科 中学校の地理－世界の中の日本－（初訂版）』帝国書院

『国語 1』光村図書

『国語 2』光村図書

NPO 法人日本語多読研究会（2006）『レベル別日本語多読ライブラリー（にほんごよむ  
よむ文庫）[レベル 2]』アスク

東京都教育委員会（1993）『外国人児童・生徒用日本語テキスト たのしいがっこう（中  
国語）』